

李東郭筆七言律詩詩箋

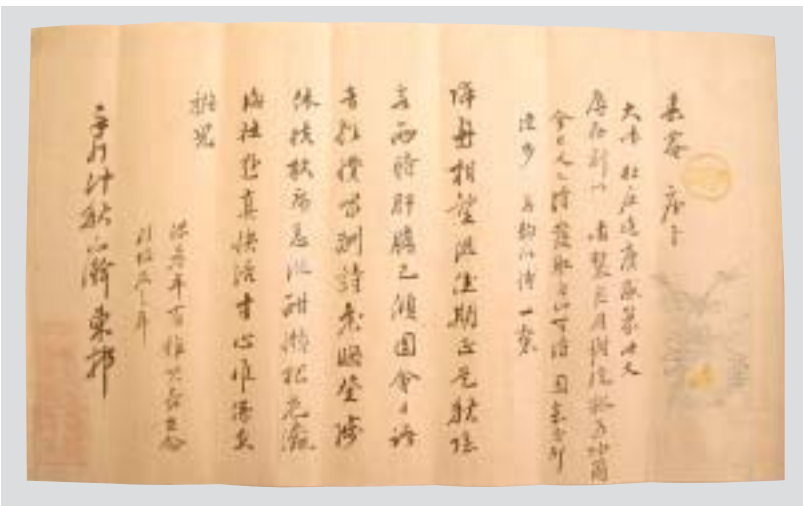
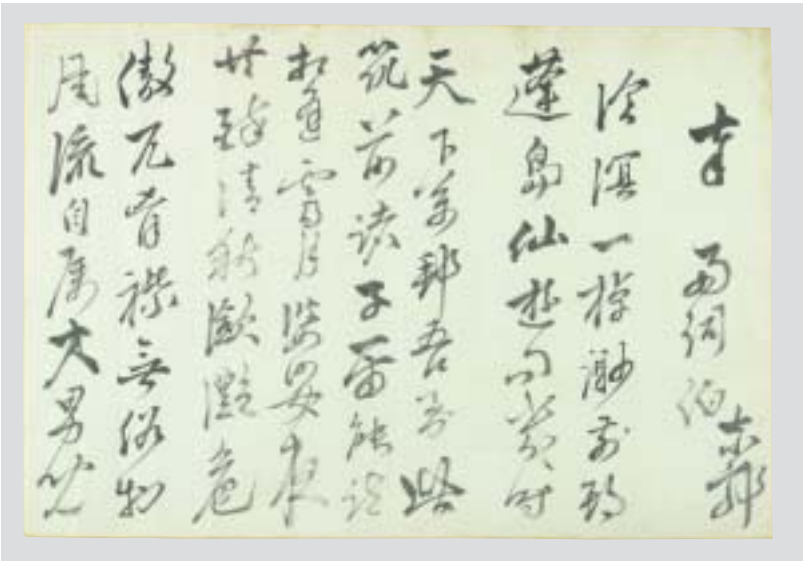
大庭, 卓也
日本学術振興会特別研究員

<https://doi.org/10.15017/9091>

出版情報 : 文献探究. 42, pp.1-, 2004-03-31. 文献探究の会
バージョン : published
権利関係 :



李東郭筆七言律詩詩箋



(上)九州大学附属図書館「竹田文庫」所蔵
 (下)福岡県立図書館「竹田文庫」所蔵

解説

大庭卓也

滄溟一棹渺前期	隣舟相望阻佳期
蓬島仙遊問幾時	正是秋陰欲雨時
天下万邦吾到此	肝膽已傾団会日
筑前諸子爾能詩	語言猶憤唱酬詩
相逢霽月婆娑夜	老嫌登陟休扶杖
共醉清秋激澗厄	病忌沈酣懶把厄
傲兀胸襟無俗物	瀛海壯遊真快活
風流自屬大男兒	寸心惟係在襪兒
滄溟一棹前期に渺たり	隣舟相望みて佳期を阻つ
蓬島の仙遊幾はくの時とか問ふ	正に是れ秋陰雨ふらんと欲する時
天下万邦吾此に到る	肝膽すでに傾く団会の日
筑前の諸子爾詩を能くす	語言猶ほ憤らふ唱酬の詩
相逢ふ霽月婆娑の夜	老いて登陟を嫌ひ杖に扶らるることを休め
共に酔ふ清秋激澗の厄	病みて沈酣を忌み厄を把るに懶し
傲兀たる胸襟俗物無し	瀛海の壯遊真に快活たり
風流自から属す大男兒	寸心惟係はるのみ襪に在る兒

李東郭は、正徳元年に來朝した朝鮮通信使の製述官。これら二点の詩箋は、福岡藩儒員竹田春庵（寛文1 延享2）が藩命を受けて、藍島（現糟屋郡新宮町相島）において通信使応接にあたった折に贈られたものである。のちに春庵は、こつして得た通信使の贈詩に自身の応酬を合わせ、筆談唱和の全過程を『藍嶋倭韓筆語唱和』（正徳元年九月成、写本一冊）としてまとめた。その一部は、この度の通信使と全国の学者文人たちとの唱和詩を集めて京都で刊行された『鷄林唱和集』（正徳二年刊）にも載録されている。『藍嶋倭韓筆語唱和』に施された註記によれば、（上）の七律は八月十九日の晩、同僚の神屋立軒とともに初めて通信使と対面、七回の唱和を終えて退出しようとしたとき、東郭がその場で書いて贈ったもの。（下）の七律は二日後の二十一日に対馬儒員雨森芳洲を通じて届けられたものと言つ。前者の筆跡は、いかにも即興に書かれて流麗と評するに相応しい。対して後者のそれは極めて沈着、朝鮮出来の色摺り詩箋に認め、二顆の印をも捺しているのは、客舎に戻つて清書したものであることを示している。詩中に触れる、本国に残してきた幼子への思いも、緊迫した筆談唱和の場から離れて、ふと想像やられたのであろう。対照的な表情を見せる二点の詩箋は、ひとしなみに同じ書体の文字で刻まれた『鷄林唱和集』からは感得できない、様々な唱和詩の表情を伝えてくれる。なお、ともに通信使の遺墨としては初めて紹介するものである。